

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



橋本紘二さんが撮影した黄土高原の写真に、丸の内を行き交うビジネスマンも足を止めた(東京駅写真展)

Contents

| | |
|----------------------------|-----|
| 写真展『中国黄土高原』報告 | P 2 |
| 春のワーキングツアー予告 | P 3 |
| 植物が増えると鳥も増える | P 4 |
| 大同におけるGENの緑化協力 環境林センター ... | P 5 |

2003.11

94

写真展 『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』 たくさんの人に見てもらいました

10月26日から11月1日まで、JR東京駅丸の内北口ドームで開催された写真展『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』（撮影：橋本紘二）はおかげさまで無事終了しました。来場者数は3万人ほど、27日のオープニングパーティーには100人余りが参加しました。協賛・協力・後援して下さったみなさん、ボランティアスタッフとしてがんばったみなさん、ご来場いただいたみなさん、縁の下で支えていただいたみなさん、ありがとうございます。ボランティアスタッフの感想をご紹介します。

写真の力が喚起するもの

藤 沼 潤 一

関東ランチでは、これまで各種イベントで、紙芝居や人形劇を織りまぜて黄土高原を一般の人に紹介してきましたが、関心をもってもらうことは大変でした。ですから今回の写真展の効果には驚きました。たくさんの人が写真の前で足を止め、ときに積極的な質問も受けました。写真に対するさまざまな想いがしばらくは写真を見た人のどこかに留まっているのだらうと思うと、説明もやりがいがありました。

今回の写真展で感じたのは写真のもつ力でした。環境問題という枠に入りそうにない人までもが写真にじっくり見入っていたのは、緑化協力の重要性を感じてではなく、写真の中の現実にぞっとしたからなのでしょう。そして写真の中の現実が何なのか、ぞっとしながら考えていたのでしょう。「緑化協力をしています」が最初にくるのではなく、緑化協力が必要と思われる現実が最初にくることで、自分も抱いているある種の衝動を、環境問題と縁が薄い人にも呼びおこすのだと思います。これが写真の力じゃないでしょうか。

これからもあの黄土高原の写真がいろいろな街角に展示されることを期待します。

やりがいのあるボランティア 茂田 井 円

27日に参加しました。早足のビジネスマンからハトバス待ちの外国人まで、さまざまな人が見入ってしまう。とにかく90枚ほどある写真の力が絶大で、ライティングにも秘訣があったようです。橋本さんは設営時に、照明を少しずらしては見直したり、写真の配置もずいぶん並べ換えたりしたとか。結果として、どこからでも自由に見られる駅にぴったりの展示となりました。写真ごとにつく説明も効果的でした。

来場者に配るパンフレットが1日あたり1,200枚あるというので、配付が主な仕事となりました。一緒にボランティアをしていた三原さんが「これほど成果が目に見える仕事は滅多にないわ」とうれしそうに、足を止める人に確実に配る姿が印象的です。素直に受け取る人が大半で、なかには「ありがとう」といわれる方もいて、じつに配り心地のいい場所でした。

「中国には行ったことがあるけど、こんなところもあるのですね」「黄砂の供給源なのか」という感想が聞かれました。質問に対応すると「この住所に案内を送ってください」といいおくり人や「観覧料よ」と寄付金を投じる人もいて、日比谷公園のフェスタなどでは感じられなかった手応えがありました。場所柄、英語や中国語を話される方が多かったので、他言語のパンフレットがあるとなお、よかったです。どなたか作ってください。また事務局以外でも関西方面から応援に駆けつけられた方もいて、驚きました。

講演会のお知らせ どうなる世界の水問題

小麦1tを生産するために、何tの水が必要？ ヴァーチャルウォーターって何？ 注目の研究者、沖大幹さんに講演していただきます。

日時：2004年1月23日（金）18時30分～20時30分

場所：大阪市立総合生涯学習センター（大阪駅前第2ビル5階）

講師：沖大幹さん（総合地球環境学研究所助教授 / 東京大学生産技術研究所助教授）

参加費：700円（資料代として）

問合せ・申込み：GEN事務所まで

土で水をきれいにする？

土壌浄化による汚水処理 報告

9月25日、大阪産業大学サテライト教室でおこなわれた菅原正孝さんの講演「土で水をきれいにする？」には、50人以上の参加があり、教室にすし詰めになるほどでした。その関心の高さに、汚水処理は中国に限らず日本でも大きな問題なのだと思われました。

土壌微生物を利用した汚水処理は従来は広い面積が必要で、実用的でないと言われていました。土壌ブロックを積

み重ねることによって狭い場所でも可能にしたというのは、まさにコロブスの卵です。

大同の環境林センターの施設は今春に動き出したばかりですが、その性能には現地の人びとも驚いています。日本でも、遠賀川で建設中とか。

大同の場合は処理水の再利用が目的ですが、日本では環境汚染を防ぐためでしょう。汚した水をきれいにして生態系に返す。複雑な仕組みも、高額な費用もいらぬ土壌浄化は、有効な方式だと思いました。（東川貴子）

助成・ご寄付

国土緑化推進機構『緑の募金』から250万円の助成が決まりました。

日中緑化交流基金から950万円の助成が決まりました。

富士ゼロックス端数倶楽部と富士ゼロックス（株）から20万円ずつ、計40万円のご寄付をいただきました。



ボーナスカンパのお願い

いつも資金不足のGENですが、今年は特に深刻です。イラク戦争やSARSの影響でツアーの中止があいつぎ、協力者の拡大が思うようにすすみませんでした。

世話人会で今後の活動のひろげかたを検討していますが、今年度のピンチ

にはまにあいません。特に国内の經常会計が不足しています。会員・協力者のみなさんに応援をお願いします。

発送作業の都合上、一律に郵便振替用紙を同封しますが、最近ご協力いただいた方には重ねてのお願いではありません。ご了承ください。

秋を満喫 バーベQ報告

10月19日、武田尾の武庫川河畔でバーベQをしました。5月に雨で中止になった企画の敗者復活戦ですが、この日は朝から爽やかな秋晴れで、絶好の日和でした。10時にJR武田尾駅前に子供4人を含め、約20人が集合。

河原へ移動すると、早速バーベQの準備に取りかかります。年の功か、カマド作りから火をおこすまで、オジサマたちの手際のよさはさすがです。

バーベQと同時進行でバウムクーヘン作りにも挑戦。卵とバターたっぷりの生地を竹のまわりに塗り重ねながら、炭火で焼きます。初めはうまくいか不安でしたが、焼きおわって慎重に竹から抜き取り、輪切りにすると、見事、年輪がきれいにできました。早速みんなで試食。おいしかった！

バーベQの後は桜の園を歩きました。ここは笹部新太郎さんの演習林だったところで、現在は宝塚市と市民ボランティアが手入れしているそうです。残念ながらもまだ紅葉には早かったのですが、秋の自然を満喫した1日でした。

(八木丈二)

関東 brunch 月例会報告

「黄土高原にかかわる人びと」

松永 光平 (GEN世話人)

今回の講師はGEN会員でもある村松弘一さん(学習院大学東洋文化研究所)伊藤知美さん(東京大学大学院生)そして筆者(東京大学大学院生)です。今年9月に黄土高原を訪れた3人が、それぞれの専門である歴史・植物・地理からの観点をまじえて語りました。話題の中心は陝西省榆林市です。榆林はGEN世話人で『黄土高原の村』の著者でもある深尾葉子さん(大阪外国語大学)のフィールドでもあります。

はじめに村松さんによる概要説明。解放直後から榆林で緑化活動に献身してきた民間林業技術者の朱序弼さんとともに植林現場を見学。廟会ネットワークを基盤とした朱さんの緑化活動と技術普及とが継続中。朱さんゆかりの廟が付属植物園をもち、育苗・樹種選定・学校の実習などに使われています。

次に筆者による榆林の地域的特徴と環境変化についての説明。榆林はモウス沙漠南縁、黄土高原北端に位置します。榆林市街地の今昔を地図と比較すると、79年には沙漠のなかに数軒の建物しかなかったところがいまや繁華街

になっています。当時沙漠にあった建物は現在の榆林学院で、いまは地道な治沙活動によって緑豊かなキャンパスとなっています。一方、米脂県など黄土高原地域では激しい侵蝕がおきていて、人の多いこの場所での環境回復にはいまだ困難がありそうです。

最後に伊藤さんによる緑化活動に用いられている樹種の説明。総じていうと針葉樹とポプラが多く、現地で植林に適した高木として樟子松・油松・側柏など、低木として榆葉松・山梅花・文冠果などが考えられるそうです。伊藤さんがみた限りでは生育状況はよく、技術も優れているとの評価でした。

会場で榆林の事情に詳しい安富歩さん(東京大学)からコメントをいただきました。朱さんの成功はあとに続く人に支えられたもので、現地で活動している人にとっては遠くから人が見に来てくれることが励みにも助けにもなるとのこと。興味をお持ちになった方、ぜひおいでください。人のつながりの発展が黄土高原での環境回復につながることを願ってやみません。

2004 春の黄土高原ワーキングツアー予告

霊丘自然植物園をメインに、村での植樹・交流、ホームステイやカササギの森訪問などを予定しています。

日程：2004年3月24日(水)～31日(水)

費用：一般＝16万円、学生＝15万円(国際航空運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、GEN年会費を

含む。旅券取得費用、空港使用料、航空保険料は含まない)

中国国際航空利用予定 関西・成田空港発着(GENスタッフは関空発着便のみ同行)

定員：30人

申込締切：3月1日(定員に達し次第締め切ります)

関東 brunch 11月 月例会のお知らせ

「中国河北省豊寧滿族自治県における
沙漠緑化活動 - 3年間のあゆみ - 」

日時：11月29日(土)15時～

場所：立教大学池袋キャンパス5号館1階会議室

講演者：丸井みのる氏(地球緑化センター)/國友淳子氏(トヨタ自動車(株)バイオ・緑化事業部)

内容：事業や研究についてお聞きしたあと、参加者で意見を交換します。参加費：無料

問合せ：伊藤知美(satomi@nenv.k.u-tokyo.ac.jp)

植物が増えると鳥も増える

～霊丘自然植物園における封山育林と鳥類の変化～

池本 和夫 (GEN会員)

霊丘自然植物園は、霊丘県上寨鎮南庄村の86ヘクタールの土地の100年間の使用権を購入して、1999年3月27日に起工式が行われた。同年春から南庄村と協定して、用地内ではヒツジやヤギなどの放牧と柴刈りを禁止した。2000年秋には管理棟が完成し、職員が1人寝泊まりして、放牧等で農民が入山しないように見張りをしている。

今年(2003年)春で開設から4年が経った。家畜の放牧や草木の伐採を禁止する封山育林の結果、今までは育つそばから食われていた草や灌木は目に見えて回復し、それに伴って、鳥類も種類や数の増加傾向が見られる。植物相が豊かになると動物相も豊かになる

という自然界の法則に沿っているようだ。

2000年と2003年に、3月下旬から4月上旬にかけての数日間、植物園で鳥類調査をした。その結果を報告する。調査範囲は、苗木保管棟の下方(植物園用地と南庄村の農地の境界)から谷筋沿いに植物園管理棟を経て、池や畑跡地の周辺、小川の起点までである。

2000年は11種・約31羽、2003年は15種・約54羽(範囲外や上空通過は含めない)で、種類は4種、総数は23羽増えた。この中で注目したいのは、カラチメドリ(Rhopophilus pekinensis)とダルマエナガ(Paradoxornis webbianus)である。ともに群れをつく

り、山地の草叢や灌木、低木の間で活動する留鳥である。両種ともよく声を出すので、1回目(2000年)にいれば見落とすことはない。だから、この3年間でどこから来たと思われる。この3年間で、カラチメドリやダルマエナガの好む生息環境ができたから、新しい生息地を探していた個体が入り込んだのである。

高見邦雄さんの『ぼくらの村にアンズが実った』によると、植物園開設以来、植物には次のような変化が起きた。草丈は以前の膝や腰の高さから胸や肩の高さになった。種類はキンポウゲ科のような毒のあるものや棘のあるものから、ハギやウマゴヤシなどマメ科が増えてきたし、かつてはほとんど見られなかったホソバユリやラン科のアソモリソウも花を咲かせるようになった。

また、遠田宏さんは『緑の地球』89

霊丘植物園における鳥類

| 和名 | 学名 | 2000春 | 2003春 | 生息状況・注記 |
|------------|-------------------------|-------|-------|------------------|
| 1.アカゲラ | Dendrocopos major | | 1* | 留鳥 *単位は羽(以下同じ) |
| 2.ヤマゲラ | Picus canus | 2 | 1 | 留鳥 |
| 3.ヤツガシラ | Upupa epops | | 1 | 留鳥 範囲外(植物園の隣接地) |
| 4.モズ類 | Lanius sp | | 1 | |
| 5.サンジャク | Urocissa erythrorhyncha | 3 | 声1 | 留鳥 |
| 6.カササギ | Pica pica | | 上空2 | 留鳥 |
| 7.ベニハシガラス | Pyrrhocorax pyrrhocorax | | 上空4 | 留鳥 |
| 8.ノドグロツグミ | Turdus ruficollis | 2* | | 冬鳥 *亜種ノドアカツグミ |
| 9.ルリビタキ | Tarsiger cyanurus | 4 | | 夏鳥 |
| 10.ジョウビタキ | Phoenicurus auroreus | 3 | 4 | 夏鳥 |
| 11.ミソサザイ | Troglodytes troglodytes | | 1 | 留鳥 |
| 12.シジュウカラ | Parus major | | 3 | 留鳥 |
| 13.エナガ | Aegithalos caudatus | | 3 | 留鳥 |
| 14.カラチメドリ | Rhopophilus pekinensis | | 5± | 留鳥 |
| 15.キタガビチョウ | Garrulax davidi | 2 | | 留鳥 |
| 16.ダルマエナガ | Paradoxornis webbianus | | 8 | 留鳥 |
| 17.スズメ | Passer montanus | | 1 | 留鳥 |
| 18.ヤマヒバリ | Prunella montanella | 1 | 2 | 冬鳥 |
| 19.カワラヒワ | Carduelis sinica | 2 | 9 | 留鳥 |
| 20.マシコ類 | | 2 | | |
| 21.ヒゲホオジロ* | Emberiza godlewskii | 5± | 7 | 留鳥 *新和名ミヤマヒゲホオジロ |
| 22.ホオジロ | Emberiza cioides | 5± | 7 | 留鳥 |

和名：山階芳麿『世界鳥類和名辞典』大学書林(1986)

学名・配列：John MacKinnon et al. "A Field Guide to the Birds of China" Oxford U.P. (2000)

生息状況：樊籠鎖ほか編『山西両棲爬行類』中国林業出版社(1998)

号で「霊丘の自然植物園では以前は目立っていた斜面の裸地も灌木におおわれて目立たなくなり、標高の高いところではリュウトウナラヤトネリコの仲間が勢いよく伸びはじめています」と言っている。

家畜の放牧と柴刈りの禁止で、下草や灌木が背を伸ばして裸地をおおい、ナラヤトネリコの仲間のような高木も勢いよく伸びている。開園以来の封山育林の効果で下草や灌木が増えてきたので、この環境変化に対応して、前述の2種の鳥が出現した。

もう1種注目すべきは、スズメである。2003年に初めて1羽記録された。スズメは人間活動と切り離せない鳥で、廃村になるといなくなる。↗

大同におけるGENの緑化協力—4—

環境林センターさらなる水問題
炭鉱廃水の浄化に挑戦

環境林センターの汚水浄化装置が成功したところ、多くの人が「飲めるようにならないか？」ときいてきます。あの装置はもともと育苗のための灌漑を目的としたものでしたが、その成果をみて、期待が高まったのです。

新しく持ち込まれた課題は、炭鉱廃水の浄化です。石炭を掘ると、同時に地下水がでてきます。汚染されていて、使えないので、これまで捨ててきました。省政府の発表では、1tの石炭を掘るのに、2.48立方メートルの地下水資源が破壊されるそうです。466の炭鉱を有する大同では、炭鉱の周囲でくらす80万人が飲み水に困る状態になりました。

逆浸透膜などをつかった設備で、ことしから一部の浄化がはじまりましたが、費用がかさむため、零細炭鉱ではむりです。

あの汚水浄化装置の基本設計にあたられた菅原正孝さん（大阪産業大学人間環境学部長）のチームの協力で、鉄バクテリア法によるごく簡単な設備で、これに挑むことにしました。GENの会員有志もそれに協力しています。雲岡石窟のすぐ近くの村で、今月から実験装置を立ち上げることにしています。成功すれば、きわめて大きな効果を発揮するでしょう。（高見邦雄）

1994年、中国側カウンターパートの代表・祁学峰所長から意見がでました。「各県のプロジェクトがバラバラでは困る。それらを統括し牽引する場がないとやっていけない」というのです。新しく参加した専門家の立花吉茂さん（現代表）からも提案がありました。このような国際協力をつづけるには「モデルとなる拠点が必要だ」ということです。この2つをドッキングさせて、環境林センターの原型ができました。

最初は、3.5haの土地を南郊区平旺村から無償で借りてスタートしました。トラクタは運転手・燃料つきで村から借りました。電気と水道は、これは活字にはしにくいのですが、最初は盗電・盗水だったのです。

判断に迷ったのは、固定した人員を雇うことになったことです。もし、私たちの活動がつづかなければ、その人たちは路頭に迷うことになります。私たちの基盤はいまよりはるかに脆弱、不安定で、いつつぶれてもおかしくない状態でした。そのうえに、センターが着工する直前、阪神大震災が発生し、私たちはその救援活動に走り回ることになったのです。

いまから考えても、あの危機をよく乗り切ったと思います。立花代表を迎えて新体制が発足し、95年4月、有元幹明さん（現副代表）を団長とする日本からのツアーも参加して、起工式をもちました。

いまから考えると、その後の事業の

発展に環境林センターが果たした役割は、欠かすことのできないものでした。黄土高原のように環境の厳しいところで、植樹を成功させるために大事なものは良質の苗木です。それまではバラバラに購入していたために、品質にバラツキがあり、ときには接ぎ木に失敗した「ニセ苗」をつかまされることまであったのです。自分でつくった苗なら、そんな心配はいりません。

各地のプロジェクトではつぎつぎ問題が発生しましたが、それをセンターに持ち帰り、解決の道を探っては、また現場に返していきました。さまざまな新しい技術をここで試し、いいものを他に広げていきました。

センターが充実してくるにつれ、ここは事業の顔となってきました。中国でもしだいに環境問題に関心が高まり、なかでも緑化事業はその中心になりました。中央・省・市の幹部たちがたびたび環境林センターを訪れるようになり、中華全国青年連合会主催の「国際環境ボランティアキャンプ」がここで開催され、イギリス、ドイツ、アメリカ、日本などの青年が参加しました。

2000年春、さまざまな事情からセンターを20haまで拡張し、20年間の土地の使用権を購入することになりました。中クラスの国営苗圃の規模です。さまざまな方法をくみあわせた土壌の改善、菌根菌の活用、土壌浄化による汚水処理など、すすんだ技術も導入しており、いまではこの協力事業の文字通りのセンターになっています。



2000年秋に管理棟が完成し、職員が寝泊りするようになったので、おそらく南庄村の若いスズメが新天地を求めて植物園にきたのだろう。そのうちに、繁殖して個体群を確立すると思われる。本来はいなかった動物が人間活動に伴って現れたということは、人間が環境を変化させたことを意味する。



ワーキングツアーで霊丘植物園を訪れる人は、スズメがいるかどうか、よく観察してほしい。

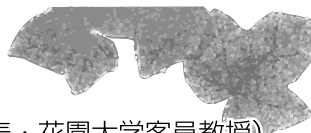
鳥は植物の実を食べたあと、糞とともにタネを少し離れたところに落とす。鳥の種類や数が増えれば、遠くへ散布するタネの種類も量も増える。人間が苗を植えて森を育てると同時に、鳥が



タネを運んで木が広がるのを助けてくれる。

いったん植物環境の変化がよい方向へ向い始めると、動物相の変化も始まり、全体としての環境が豊かになる。環境変化のひとつの指標として、鳥の調査を今後も数年おきに続けるつもりだ。

植物を育てる (25)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

ドングリを育てる

本紙93号、植物を育てる(24)でドングリの発芽のタイプについての実験データをご紹介した。ここでは温度と発芽の関係をご紹介しよう。

ドングリには常緑生のシイの仲間とマテバシイの仲間とがあり、カシの仲間には落葉性と常緑性の種類がある。日本語のカシ(榎)は紛らわしいので、落葉性はナラ(櫟)、常緑性はカシ(榎)と呼ぶことにする。

ナラの方は熟して落ちたらすぐに発芽するが、カシの方は春まで発芽しない。そこで人工的にいろいろな温度条件を作って発芽させてみた。

実験の結果

[5 ± 3]ではナラグループだけが発芽し、カシグループは翌年になっても発芽しなかった。常緑性のカシ類はやはり暖かいところの植物だけに5 という低温では生きていけないも

のようである(図1)。

[10 ± 2]ではナラグループは調子よく高率で発芽したが、カシグループは50%以下しか生えなかった(図2)。

[20 ± 2]ではナラグループは素早く発芽したが、カシグループは30%以下しか生えなかった(図3)。

[30 ± 2]ではカシグループはほとんどが腐敗して生えなかった(図4)。

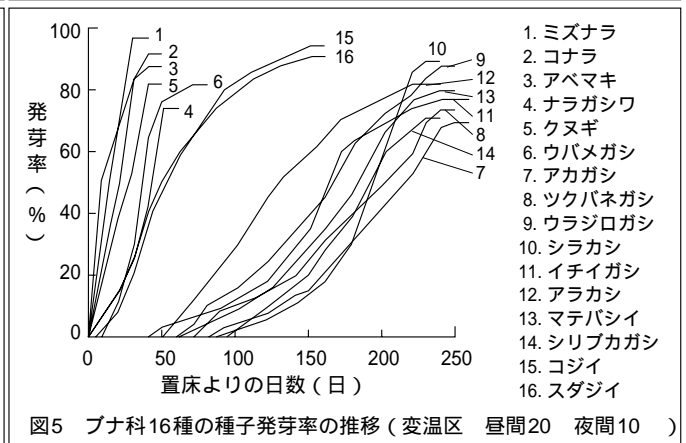
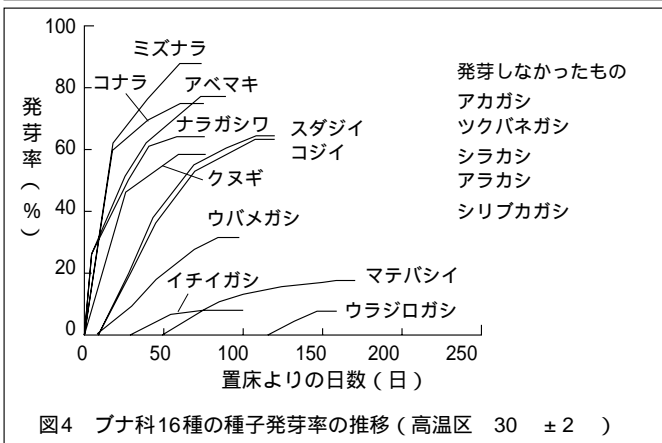
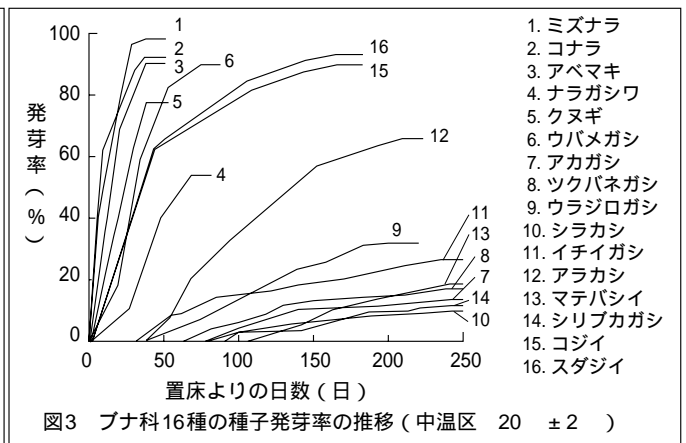
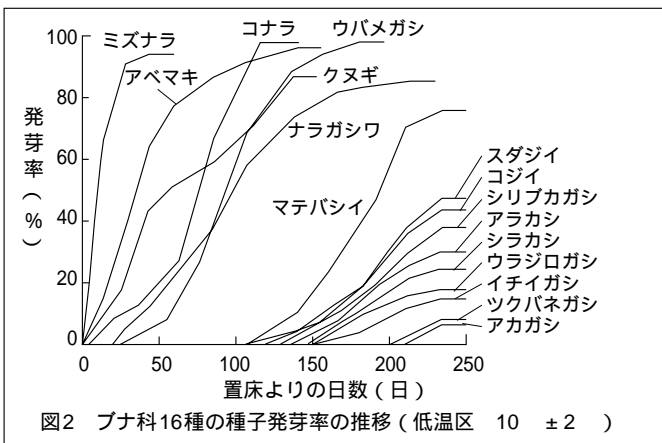
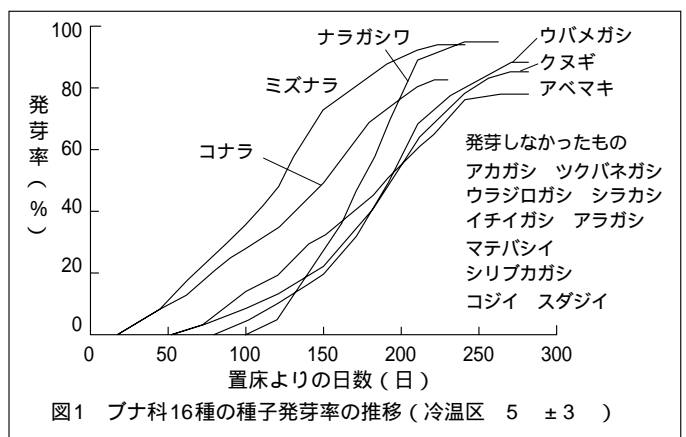
[夜間10 ~ 昼間20]の変温区ではいずれもよく発芽し、ナラグループは年内に、またカシグループは翌春に生え、自然状態と同じ結果

になった(図5)。

考察

ナラ類は自然状態では、落下したらすぐに発芽するが、カシ類は翌春に発芽する習性がある。この実験でもすぐに発芽するナラ類は温度には関係なく生え、春まで休むカシ類は温度の低い冬に高温であると腐ってしまうことを示唆した。夜間低温で昼間高温になる条件は、20 程度なら両グループともに発芽に具合がよいらしい。

* ドングリ類は、乾燥すると死んでしまうので最後まで保湿が必要である。



黄土高原史話〈16〉

猫舌から鬼舌への人類史

トリビアとは、つまらない事柄に関する無駄な知識、という意味のラテン語。

アイザック・アシモフいわく。

「人間とは、無用な知識が増えることに喜びを感じずる唯一の動物である。」

しかし、考古学者は単純なのか、ベンジャミン・フランクリンによる次の定義を信奉。

「人間とは、道具を作る動物である。」

そのうち、火を作るための道具の発明はいつ頃だったか。

140万年前、ケニア・チエソワンジャ遺跡の焼き火跡は、もちろん山火事など自然発火の利用。

クロアチア・クラピナ遺跡出土の前期旧石器時代の焼け焦げたカバノキの断片は、最古の火鑽杵（ひきりきね）、火打ち石は、ヨーロッパ後期旧石器時代の3万年前に出現。

火から与えられた恩恵は多岐・多大ながら、加熱による料理法もその一つ。

繊維質を分解して栄養価を高めたり、殺菌による栄養源の拡大。やわらかな

谷口 義介（摂南大学教授）

食べものはアゴの退化をもたらし、脳頭蓋の発達を促し、知能を進化させた、とか。

味覚の発達・うま味の発見も見落とせません。

最初は「焼く」「あぶる」料理から。もちろん焚き火や炉のかたわらで。

次いで「煮る」。これには土器が必要で、最古の土器は1万3000年前、シベリア・ガーシャ遺跡の樽型土器といわれるもの。

その後は「蒸す」。これには土器を二つ重ねることが条件で、下の土器（たとえば鬲）で湯を沸かし、底部を穿孔した上の土器（甑）に蒸気を通すやり方。鬲（れき）と甑（こしき）を一つに合体した青銅器も、殷代には盛行しました（図参照）。

最後は「いためる」「揚げる」。土器ではムリ、青銅器は高価となると、どうしても鉄製で、鉄ナベが三国時代あたりからようやく一般化。

赤ちゃんへのミルクは、母親の体温ぐらい。猫舌だった子供も、成長する

につれ熱いものでも平ちゃらとなり、なかには鬼舌になる人も。これが、そのまま人類史なわけ。そこで、

「人間とは、熱いものを飲

み食いすることのできる唯一の動物である。」

これ、何へエもらえます？

前漢時代の『礼記』という書物に、次のごとき記載が。

「東方を夷という。ザンバラ髪で入れ墨し、火食しない者がいる。

南方を蛮という。ひたいに入れ墨し、あぐらをかく。火食しない者もいる。」

東夷とは古代の日本人、南蛮とは呉越の民。この文献を残したのは黄河流域の華北人で、文明の中心にいると自認していました。つまり「火食」しない人間は未開・野蛮だということ。

しかして2000年後。大同市北部の陽高県の民謡。

「山は近くにあるけれど、

煮炊きに使う柴はなし。」（上田信訳）



ビデオ上映&対談

池谷監督と語る 中国黄土高原のいま

世界で3番目に有人宇宙飛行をなしとげ、世界の大国として存在感を日に日に増している中国。経済発展にわきたつ沿海部から1歩はいれば、私たちが大同で目にするような、発展から見捨てられた広大な内陸部が存在します。

黄土高原のど真ん中・陝西省に取材した池谷薫さん撮影のドキュメンタリー『黄土の民はいま』を上映したあと、中国の庶民の姿を追い続けている池谷さんと、12年間大同の農村で緑化に取り組んできた高見邦雄GEN事務局長が対談します。

日時：11月24日（月・祝）13時30

分～17時（開場13時）

場所：大阪市立弁天町市民学習センター（オーク2番街7F。JR環状線「弁天町」駅北出口、地下鉄中央線「弁天町」駅2A出口から直通路）

内容

ビデオ上映「黄土の民はいま」

新作「延安の娘」予告編

池谷さんと高見さんの対談「中国近代化の波を生きる黄土の民」

定員：50人 参加費：800円

申込み：GEN事務所まで

主催：GENユースプランチ

摂南大学中文研

GENのパネルを展示

細尾 義広（大学生）

摂南大学中国文化研究同好会は今年

4月、顧問に谷口先生を迎えてからポイントを「黄土高原の暮らしと文化」にしぼり、GENの活動にも積極的に協力。SARSの余波でワーキング・ツアーは実現できませんでしたが、9月には会報の発送作業の手伝いをしました。また10月31日から11月2日の3日間おこなわれた摂大祭ではブースを開設し、GENから借りてきたパネルや写真を展示、地図や説明文を作成して、黄土高原の現状と緑化活動の実際を紹介しました。初日は教職員、2日目は学生、最終日は一般の見学者が多く、部員の説明に耳を傾けてくれました。同時に絵はがき・きり絵・書籍を販売したところ、1万3650円の売上げがありました。現在部員は11名、そのうちの何人かは来年のツアーに参加の予定です。



地球環境基金創設10周年記念
環境NGOの集い

地球環境基金の助成をうけている
NGOなどが参加・報告します。

【関東】

日時：11月27日（木）10時～17時
会場：国際連合大学・環境パートナーシップ
フォーラム（EPO）（地下鉄「表参道」
駅5分、各線「渋谷」駅15分）
定員：300名（先着順）
参加費：1,000円（資料代）
申込締切：11月21日必着
問合せ・申込み：地球緑化センター
（〒104-0028 東京都中央区八重洲2-
7-4清水ビル3F TEL. 03-3241-6450
FAX. 03-3241-7629）

【近畿】

日時：11月29日（土）10時～17時
会場：京都商工会議所（京都市中京
区烏丸通夷川上る、地下鉄「丸太町」
駅6番出口）
参加費：無料 当日参加可能
問合せ・申込み：環境市民（〒604-
0932 京都市中京区寺町通二条下ル
呉羽ビル3F TEL. 075-211-3521
FAX. 075-211-3531 e-mail: life@
kankyoshimin.org）

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

アジアの森林・日本の森林
守ろう暮らしと地球環境

東アジアの森林気候帯での生活の立場から、自然と人間、人と森林の関わり方について考えます。

日時：12月13日（土）13時～17時
場所：大阪府立労働センター（エルおおさか）大ホール（京阪・地下鉄谷町線「天満橋」駅徒歩5分）
参加費：500円（資料代）

パネリスト：小川房人氏（大阪市立大学名誉教授・GEN顧問）/小坂育子氏（滋賀県水と文化研究会事務局長）/渡辺弘之氏（京都大学名誉教授）/バル・ピアン氏（弁護士・マレーシア）/岡崎時春氏（FoE Japan代表理事）/高見邦雄氏（GEN事務局長）/角谷宏二氏（全国木材連合会常務理事）

主催：シンポジウム「アジアの森林・日本の森林、守ろう暮らしと地球環境」実行委員会（事務局：NPO法人自然と緑 大阪市東成区中道3-2-34 TEL. 06-6978-5060 FAX. 06-6978-5061 e-mail: sizen_mi@osb.att.ne.jp URL http://home.att.ne.jp/iota/sizen_midori/）

ポンカンはいかがですか

高知の田中さんからの季節のたより。おくりものにも好評です。

ポンカン（低農薬・有機栽培）

| | | | | |
|---|-------|-----|-----|--------|
| A | 3L/2L | 5kg | 化粧箱 | 4,000円 |
| B | " | " | 普通箱 | 3,700円 |
| C | " | 3kg | 化粧箱 | 2,600円 |
| D | L | 5kg | " | 3,500円 |
| E | " | " | 普通箱 | 3,200円 |

出荷：12月ごろ～来年2月

送料別途。関西630円、関東840円（20kgまで）

お申し込みは田中隆一さんまで。

〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦
TEL/FAX. 0887-29-2500

売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GENの紹介」とひとこと添えてください。

編集後記

いやあ、まいった。今回は文字ばかりです。ごめんなさい。

東京駅での写真展、中国人も多かったそうですが、真剣に見る人といやそうにさっと通りすぎてしまう人に分かれたとか。わからないでもないけど、やっぱり見てほしかったです。（東川）